

## あとがき

創刊号の「あとがき」を執筆してから満五年経た。月並な感懐であるが、五年という歳月は決して短くはない。その間に千人近い卒業生を世に送りだし、研究室も移転した。副手も何人か交替されたし、先生の顔触れも変ろうとしている。

幾度かの経済的危機に見舞われながらそれを乗り越えて六号の学会誌を出しつづけたということはそれなりに評価されることと思う。このような学会誌を出すことの意義は、学会員の研究活動の促進、相互の親和、学術の開発への寄与、対外的な広報などの幾つかが考えられる。充全とはいえないまでも、本誌は、それぞれの分野で相応の役割を果たしてきたと思われる。殊に、商業的な発表機関と違って、自分の選択した課題について自由に執筆できる本誌のような舞台がいかに貴重かは、失ってみてはじめて骨身に徹してわかる事実であろう。

次の五年間に学習院女子短期大学国語

国文学会にどのような変動が訪れるか。それを予測することはできないが、恐らく本誌だけは確実に号数を重ねていることであろう。「あとがき」二度目の執筆にあたって、創刊号発足当時の初々しい緊張と決意を、いま改めて思いだしている。

(諏訪春雄)